

第134回女川原子力発電所環境保全監視協議会議事録

開催日時：平成27年8月25日 午後1時30分から

開催場所：KKRホテル仙台 2階 蔵王

出席委員数：24人

会議内容：

1. 開 会

○司会 ただ今から、第134回女川原子力発電所環境保全監視協議会を開催いたします。

本日は、委員数34名のところ、24名のご出席をいただいております。本協議会規定第5条に基づく定足数は過半数と定められておりますので、本会は有効に成立していることを御報告いたします。

2. あいさつ

○司会 それでは開会に当たりまして、若生副知事からご挨拶を申し上げます。

(若生副知事あいさつ)

○司会 ありがとうございます。それでは若生会長に議長をお願いし、議事に入らせていただきます。

3. 議 事

(1) 確認事項

イ 女川原子力発電所環境放射能調査結果（平成27年度第1四半期）について

○議長 それでは、議事に入らせていただきます。

はじめに、確認事項イの平成27年度第1四半期の女川原子力発電所環境放射能調査結果について説明願います。

[確認事項イにつき事務局、東北電力より説明]

○議長 ありがとうございます。それではいろいろ説明がありましたので、区切って皆様のご意見、ご質問を受け付けたいと思います。

最初に、昨年度の第4四半期の調査結果の訂正について説明がございました。お手元の参考資料-1でございますけれども、まずその点につきましてご質問、ご意見ございましたら、委

員の皆様どうぞよろしくお願ひいたします。どうぞ。

○長谷川委員 私どもはこの監視協議会あるいは測定技術会でデータを見ていますが、ほとんど見た目にはわからないような結果だったので、これは我々としてはしょうがないなという気がします。ただ原因については、このときの業者が、余り実績がなかったからだとも聞こえてきます。こういう場合の入札の仕様には、（製作・納入）実績、製品システムの信頼性などもかなり求められると思いますので、価格だけで決めるのもどうかという気がします。一方、広くいろいろな会社に応募していただき、納入してもらうことも大事ですが、もう少し入札のときにもうちょっと突っ込んだもの（仕様、実績調査など）ができないのか。さらに検収のときに、ソフトのチェックなどについても、もう一步踏み込んで調べていただけないかと思います。非常に細かいところの微々たる数字の差ですからなかなかわかりにくいとは思いますが、ただ今後いろいろなことがありうるので、入札の仕様や検収などにももう少し検討をくわえていただければと思います。希望です。

○環境放射線監視センター 所長の榎野と申します。お話がありましたように、仕様書等でデータの集計・表示・出力等を適確に行うものとしておりますが、その仕様の範囲内で広く業者さんが参入した入札を行い、価格の低いところが落札することになります。今回決定した業者とは、今後、仕様を基にデータの間違ひがないようなシステムの運用をしたいと考えております。

○長谷川委員 できれば、ケース・バイ・ケースですけれども、この場合はソフトの問題なのかもしれないかもしれませんが、検収の条件などにそういうことを考えておいていただきたいと思います。ここで、こんなこと言うのは適当でないかもしれませんが、隣の県では（放射線モニタリングシステムの導入に関して）入札価格重視で業者が選ばれた結果、（システムが）検収日には完全には稼働しなかったことがあります。ちょっと極端な例ですけれども、“入札にあたってできるだけ広く入札に参加してもらう”という精神も大事ですが、そうかといって環境放射能や放射線モニタの問題では、常に安定で信頼できる結果が得られないと無意味な場合もありますので、その点をよろしくお願ひします。以上です。

○環境放射線監視センター わかりました。

○議長 ほかにご質問、ご意見ございましたらお願ひいたします。

よろしいでしょうか。ご意見、ご質問なければ、この平成26年度第4四半期の調査結果の数字訂正につきましては、この場をおかりしてご確認をいただいたということでよろしいでしょうか。

〔は い〕

○議長 ありがとうございます。

それでは、本年度の第1四半期の環境放射能調査結果等について、ご質問、ご意見ございましたらお願いいたします。なお、補足説明がございましたベースラインの上昇あるいは東北電力さんから説明があった、1号機放水口モニタの計数率上昇事象も含めまして、ご質問、ご意見ございましたらお願いいたします。

○真野委員 資料-1の3ページ、(1)のイのモニタリングステーションの記述の4行目ですが、「福島第一原発事故前と比較して線量率が高いレベルで推移しているが、・・・」という文章があります。しかし、グラフは非常に短い期間の変動しか示してなくて、それより長期的な推移については、この文章でしか我々はわかりません。例えば、後ろのほうの環境試料に関する濃度の推移については、事故前と現在どうなっているかという長期的な変動が示してあって非常にわかりやすいわけですけれども、この3ページの記述についてもどのくらい高いのかとか、そういったことがわかるような記述にさせていただくと、皆さんが判断できると思いますけれども、いかがでしょうか。

○事務局 記述については申しわけございません。このままでもとは思っておりますが、例えば年報では、資料-3の9ページをご覧いただくと、過去の年平均ですとか、事故前後の最大値などをあわせてグラフでお示ししております。それから今のお話の部分につきましても、参考として資料-1の14ページをご覧いただくと、こちらは表ですが、電離箱についてこういう線量で推移してきたと、平均値がどのくらいの範囲に入っておりますというのは、数字でお示しさせていただいております。それで年間の傾向もしくは1年間の数字というものにつきましては、年報のほうでお示しをさせていただいたところでございます。

ただ、これでもまだわかりにくいということであれば、検討させていただければと思っております。また、その辺のところでご助言いただければと思っております。

○真野委員 どうもありがとうございます。大変な経験でしたけれども、福島事故前後で貴重なデータがとれているわけですから、どういうふうにその前後で変わっているのかということ、見える化できるような工夫をしていただければありがたいなと考えています。以上です。

○事務局 わかりました。ありがとうございます。もう一つだけ補足をさせていただいてもよろしいでしょうか。

皆様にお配りしております参考資料の中に、このようなカラーでお示しをしたものがございます。こちらは(広報誌)原子力だよりみやぎに記載させていただく内容でございます。こちらでは、放射線の強さというところで、左側の一番下のところに棒グラフでお示ししております。

す。例えば女川局であれば水色の部分が平成22年度まで、つまり事故前の測定の範囲、そして紫の部分が事故後に観測されている範囲、そして緑の部分が今四半期における測定の範囲をお示ししております。年ごとの推移はお示しできておりませんが、事故前と事故後、そして現在の空間放射線の線量率の関係性について、分かりやすくお示しさせていただくようにしているところです。記載の仕方については、今後ともご助言いただければと思います。

○議長 いろいろところで説明がなされていますけれども、せっかくのご提案ですから、調査結果資料に反映可能かどうか、ご検討していただきたいと思います。

○事務局 では、検討させていただきたいと思います。

○議長 ほかにご意見、ご質問ございましたらお願いいたします。

○長谷川委員 資料-1の9ページの塚浜局の線量率が上がっています。しかし、計数率には異常はない。そうすると、こういうのは原因を調べるのはなかなか難しいと思うのですが、この線量率を計算するときには計数率にある計数を掛けるだけですか。(NaIシンチレーション検出器からの出力信号に対して、)モニタシステムではどういう操作をやっているのでしょうか。

○環境放射線監視センター 先ほど見ていただいたスペクトルのエネルギーごとにその計数率で線量率を算出しています。

○長谷川委員 (空間線量率を求めるにあたってNaIシンチレーション検出器からの出力信号を分配し、)エネルギー領域ごとに検出効率補正を行うために、(電子回路で)何か補正係数をかけているということでしょうか*)。

*)(追記)NaIシンチレーション検出器を利用した空間ガンマ線線量率測定システムで標準的に使われているDBM(Discrimination Bias Modulation)方式。

○環境放射線監視センター 放射線のエネルギー毎の計数率とそのエネルギーとで線量率を算出し、合計するものです。

○長谷川委員 すると、ピークを幾つか……。

○環境放射線監視センター それぞれのピークが重なるようなスペクトルであれば同じような線量率になるはずです。……ちょっとお待ちください。

○環境放射線監視センター 環境放射線監視センターの佐藤です。モニタリングポストの検出器の信号線は2本に分かれており、計数率やスペクトルを計測する装置と、線量率を計測する装置とは別々につながっております。

○長谷川委員 そうですか。じゃ、そっちのほうの系統で何か……。

○環境放射線監視センター 何らかの障害があったのではないかと考えております。

- 長谷川委員 メーカーはこういう経験はしてないわけですか。
- 環境放射線監視センター メーカーからは同じような現象はこれまでなかったと聞いております。先ほどお話ししましたように、現地では照射試験等を行なっており、その照射試験の結果、J I S規格や自主的に決めている線量率の誤差の範囲内であったので、メーカーとしては機器に特別な異常はないと判断したと報告を受けております。
- 長谷川委員 いや、この（空間ガンマ線）線量率、これだけの差異が出力・表示されても原因がわからない（さらにメーカーの自主的に決めている誤差範囲内だと言う）のはおかしいと思います。県民の皆さんは心配になると思います。もう少ししっかりとメーカーは頑張っていないとは言いませんが、もっと努力してくださいと伝えていただきたい。そうしないと、何かあったときに、こういうものがたまたまでもあるようでは困ります。何年かに一回しか起こらないかもしれないし、これつきりかもしれない。だけれど本当に何かあったときにこういうことが同時に起きるかもしれない。非常に悩ましいところなので、十分注意してやっていただきたい。
- 環境放射線監視センター 継続して、原因調査に努めていきたいと思います。
- 議長 メーカーには、こういう意見が監視協議会からもあったということを、きつく重く受けとめていただいて対応してもらおうようにしていただきたいと思います。
- ほかにご質問、ご意見ございましたらお願いします。どうぞ。
- 岩崎委員 測定結果の中で、降水があるものとないものがあるようですが、湿性沈着を起こしたかどうか判定する際に、やはり降水の有無というのは非常に重要だと思いますので、降水を観測しているところとしていないところがあって、降水を表示していないのか。その辺まずお聞かせ願いたいことと、それから可搬型のモニタリングポストに関しても、降水の有無がわかれば湿性沈着によるものであると言えるのではないかと思います。降水観測の可能性についてどうお考えでしょうか。
- 環境放射線監視センター 今、お話ございましたように、測定局によって雨量計があるところとないところがあります。雨量計があるところでは、雨量をあわせて表示しております。雨量計を設置している場所は測定局舎の屋上です。可搬型モニタリングポストは、先ほど塚浜のモニタリングポストの写真を見ていただきましたが、津波で失われた測定局の代替えで、局舎がなく線量だけを基本的に測定しております。今後、新しいモニタリングステーションとして、市町の計画とあわせながら再建していく考えでございます。現在はこの状況で一応表示はさせていきたいと思いますが、それぞれ測定局は比較的狭い範囲にございまして、ほかのモニ

タリングステーションの雨の情報がそのまま参考となり、基本的には同じような変動傾向を示しているという状況でございます。

○岩崎委員 どうもありがとうございました。やはり線量と降水の両方を測っていただければ湿性沈着の有無についてより確かな情報が得られると思いますので、よろしくご検討をお願いします。

○議長 ほかにご質問、ご意見ございましたらお願いいたします。どうぞ。

○真野委員 同じ資料－１の２３ページ、２４ページですが、非常にわかりやすく、全体が把握できていいと思います。しかし、原発事故前のデータとして最大値だけがプロットしてありますが、この図を見ると、その下についてどうなっているのかが知りたくなります。やはり事故前の平均値であるとか、標準偏差であるとか、そういったものに比べて現在の状況はどうなのかといったような判断ができるようなに、図を改良していただけるとありがたいなと思いました。以上です。

○議長 これは、可能ですね。

○事務局 検討させていただきます。どういう形でいいかというのはご相談をさせていただきながら、皆さんがすぐにその状況がわかり、また参考にできる図に改良してまいりたいと思います。よろしくをお願いいたします。

○議長 平均値であれば線１本引くだけですし、そのほかにも必要なものがあればつけ加えるなど、ご検討いただければと思います。

ほかによろしいですか。なければお諮りいたします。伊の「環境放射能調査結果（平成２７年度第１四半期）」につきましては、この数字をもってご確認をしていただくということによろしいでしょうか。

〔は い〕

○議長 ありがとうございます。それでは、確認をさせていただいたということでございます。

ロ 女川原子力発電所温排水調査結果（平成２７年度第１四半期報告）について

○議長 次に、議題のロでございますけれども、平成２７年度第１四半期の温排水調査結果の調査結果について事務局からご説明願います。

〔確認事項ロにつき事務局より説明〕

○議長 ありがとうございます。

ただいまの説明に対しまして、ご質問、ご意見がございましたらお願いいたします。どうぞ。

○真野委員 説明の中で表がたくさんありますし、図についても比較をするという意味でぴんとこないようなものがたくさんあります。例えば4ページに前面海域と周辺海域の測定データが表で示されていますが、前面海域と周辺海域で余り差がないと言われても、表を見てぱっとイメージがわきません。それから、今期の測定結果が過去の測定結果の範囲内であるというような説明を多くされていますが、それが何を意味するのかよくわかりません。

要するに、過去の測定結果は発電所が稼働中のものがほとんどだと思いますが、現在は全然稼働していないわけですので、差があるのは普通だと思いますが、較差がないから異常がないというような説明は、では原子力発電所が稼働しても周辺には何ら影響を与えていないのかというようなイメージを持たせるようなご説明になっているのではないかと思います。ここでご説明いただくのは、原子力発電所が稼働していないことによって、稼働しているときと比べてどうなのかと、そのような違いをしっかりと説明していただくのが、今後原子力発電所が稼働した場合に、そのデータを見るときに参考になると思います。そういった視点を持ってデータを整理するとか、ご説明いただくとかしていただかないと、何のために停止中の水温や塩分濃度を測ってご説明いただいているのか、よくわからないんですけれども、いかがでしょうか。

○事務局 説明の仕方自体、稼働時の説明を踏襲しているものですから、当然温排水により高い温度が出れば、何らかの影響が出るんじゃないかという、その前提のもとに温排水調査が始まっておりますので、そのモニタリングという位置づけで説明のこの様式になっていました。それと、同じように現在の比較を説明させていただいている。要は、周辺海域と前面海域の話も、周辺海域が一番スタンダードというんですか、それに対して前面海域、発電所の影響の部分がその範囲の中にあるわけですから、そこだけが突出した環境にはないということを示すために、最大値と最小値というふうな説明を表の中でさせていただいているという位置づけということで、おわかりになりますでしょうか。

○真野委員 それは、ルーチンワークとして非常に大事なチェックだと思いますが、原子力発電所が稼働していないのに、そういう説明だけで終わるとするのは非常にもったいないような気がしますし、聞いているほうも当たり前のことを余りわかりやすすくないような表を使って説明されても、時間の無駄のような気がしますので、もう少し稼働中と現在との違いについて追加説明として加えていただけると、時間を使って頭をひねっている甲斐があるのではないかと思いますので、コメントをさせていただきました。以上です。

○事務局 何かの形で稼働中と現在という見せ方も工夫してみたいと思います。検討させていただきます。

○議長 経年変化で同じやり方でやってきましたので、今後つくらなければならないということで、これはこれとしまして、あと説明の仕方とか、あるいはせっかく今何も動いていないのが長期間あるので、この機会にそのデータを蓄積するとか、比較データはこれでいいと思うんですけれども、それ以外プラスアルファのところもせっかくだから先生やったらいいんじゃないかというご提言だと思いますので、そこを踏まえて少し工夫をしていただければと思います。先生、そんな感じでよろしいですか。ありがとうございました。

ほかにご意見、ご質問ございますでしょうか。

○尾定委員 16ページで、1号機と2号機、3号機の較差で、マイナス1度に関する説明をされたようですけれども、そのあたり4月15日の調査結果を見ると、塩分も濃度もかなり低いんですよね。実際どういうふうな状況になっていたのでしょうか。

○事務局 前日から雨が降って、前日が12ミリの雨が降りまして、調査当日4月15日も39.5ミリの雨が合ったので、表面の塩分濃度が下がったということです。

○尾定委員 すると沖合のほうからちょっと冷たい……。

○事務局 沖合のほうの話はまた5月の話でありまして、ここの16ページの水溫較差の表面マイナス1度は取水口の構造が閉鎖的というか少し限られた空間、狭い空間といいますか、一番岸側の、しかも狭いエリアなので、高い気温の影響を受けて取水口の水溫が上がっています。本来稼働していれば、取水口を水が流れていますので水溫はそれほど上がらないのですが、この場合は止まっていて自然に近い状態なので気温の影響をもろに受けやすくなっているということで、表面0.5メートルと1メートルがそれぞれ浮上点よりも逆に温度が高くなったという現象です。

○尾定委員 わかりました。

○議長 ほかに、よろしいでしょうか。

なければ、先ほどのデータで調査結果を確認していただいたということにさせていただきますと思います。

[はい]

○議長 ありがとうございました。

ハ 女川原子力発電所環境放射能調査結果（平成26年度年報）について

○議長 次に、3番目ですけれども、昨年度の環境放射能調査結果についてご説明願います。

[確認事項ハにつき事務局より説明]

○議長 ありがとうございます。

昨年度1年間を通しての調査結果の取りまとめでございますけれども、何かご意見、ご質問ございましたらお願いいたします。

こちらはよろしいでしょうか。

〔は い〕

○議長 ありがとうございます。それでは、これをもちまして昨年度の環境放射能の調査結果を確認していただいたということにさせていただきます。

(2) 報告事項

女川原子力発電所の状況について

○議長 次に、報告事項でございますけれども、東北電力株式会社のほうから女川原子力発電所の状況についてのご説明があります。よろしくをお願いいたします。

〔報告事項につき東北電力より説明〕

○議長 ありがとうございます。

ただいま東北電力さんのほうからのご説明に対しまして、ご質問等ございましたらお願いいたします。

○木村（稔）委員 調査の整理はできたような説明をいただきました。しかし、今後女川原発が再稼働した場合、風向きによる問題、もう一つは、最悪の場合、近隣住民がどのようにして逃げるかというか、この場所から去っていくかという問題があります。特に牡鹿半島の場合、一番突端に位置していますから、道路も大変不便だし、そうすると1つの道路ではとても逃げ切れなくなると思いますので、その辺の問題をこの前もお話ししましたが、今明快にそれを説明してくださいと言っても無理だと思いますが、稼働するまでぜひともその辺の問題を整理していただきたい、そのように思います。

○議長 ありがとうございます。木村委員からは前回もこのお話がございました。いわゆる避難計画の話でございまして、当然、これから早急に詰めていかなければならない課題でございます。まず第1番目に避難計画というときに、最終的には市町がつくることになるわけでございますけれども、そこで難しい広域避難あるいは県外避難というのがありますので、そういった広域調整は県で行うというのが一つでございます。また、避難計画を立てるときにガイドラインなるものがないとこれは立てられませんので、県でガイドラインをお示ししています。さらに、それに基づいて、例えば道路がもう一つ必要だとかそういったことになると、当然

市町だけでできない場合もあり、県も共同してやっていくというような形になろうかと思っ
ていまして、その辺の調整を今鋭意しているという状況でございます。

いずれ皆さんにご心配ないような形で、市町そして県一緒になりまして、この避難計画につ
いては対応させていただきたいと今思っているところでございます。よろしくお願いいたしま
す。

ほかにご質問等ございましたらお願いいたします。

○長谷川委員 東北電力さんをお願いしておきたいことがあります。今回のチャンネルボックス
の一部欠損（資料4-2 報告(2/4)、p3~8）、これは安全には問題ないということはよ
くわかったんですが、クリップ接合部が極端な場合（この欠損がもっと拡大していった場合）
にどういうことが起こるか。また、後のほうのウォーター・ロッド（資料4-2 報告(3/4）、
p9~13）についても、もっと曲がっていたらどういうことが起こるのかということに全く触
れていないですね。簡単に、“この問題に関しては、こういうおそれがあるが、現状はこうで
まだそこには至っていない”というような形で、きちんと示していただけないでしょうか。

それから、チャンネルボックスも製造時期がいつごろで、今回どうしてわかったのか。例え
ば3・11後の検証で、これまでやっていなかった検査でわかったのかどうか、それから他電
力でも同じことが起こっているのかどうか。それは全国的に見て、あるいは時期的に見てどう
だったということを少し説明いただければと思います。

また、ウォーター・ロッドのところの再利用のときの脱着作業で、例えば柏崎刈羽ではちょ
っと無理したのじゃないかという話もあります。それを踏まえて東北電力さんではこの作業に
対してどういう注意をなさっていかれるのか。例えば、マニュアルの改善とか何か考えておら
れるのかどうか。また今後の対策はどうなっているのかということを示していただかないと、
大丈夫でしたというだけでは、県民は安心できないのではという気がします。以上です。

○東北電力 それでは、チャンネルボックスの欠損の関係についてでございますが、長谷川委員
のおっしゃったように、欠損部が非常に小さいことから問題はないということになります。今
回の欠損については、原因を見ましても、腐食という関係でございましたので欠損部は小さい
ものでしたが、これが別な原因により大きな割れになりますと、やはり炉内の異物となり、不
具合が生じる可能性がございます。

今回の場合は腐食といった原因でございますので、再利用も可能なものでございました。こ
の件につきましては、先ほどのご説明の中でも製造メーカーが2社ございまして、神戸鉄鋼と
いうメーカーと、米国のカーテックスというメーカーです。神戸鉄鋼のほうは平成10年以降

でございますが、カーテックス社製は平成9年以前に製造されており、それ以降このカーテックス社製は製造工程を変更して、こういった腐食関係につながるような溶接作業はされないということでございました。神戸鉄鋼においてもこの原因を見まして、平成26年以降製造工程を変更してございまして、これ以降はこのような事象は発生しないものと考えてございます。この点につきましても、女川と同様のBWRプラントでも幾つか発見されているということでございます。

また、ウォーター・ロッドの件については、起因が柏崎のこととございまして、それをもとに指示が発出されたことから、点検いたしました。柏崎のほうはかなり負荷をかけたために曲がりにつながったものと考えてございます。女川についてはそのところも考慮した手順になってございます。いずれにしてもウォーター・ロッドの変形が小さければほとんど問題ないのですが、これが極端に曲がるようなものであれば、例えば隣の燃料に接触することにつながりますので、そういったときには燃料の冷却効果が薄れてくるという形で、過熱につながるというものもございまして。その点については定期検査時期の燃料集合体の検査もしてございますので、少なくとも女川にはウォーター・ロッドの変形はございませんでしたので、そういったトラブルにつながることはないと考えてございます。

○議長 ほかにご質問、ご意見は。どうぞ。

○真野委員 スライドの15枚目、4.1の新規制基準適合性審査、規制庁の点検項目が載っていますけれども、この中にいろいろな外的要因、地震、津波、竜巻、火山という項目挙げられています。原子力規制庁はこれらの状況もクリアするようというような規制があるんですけども、これらの外的要因、それぞれ多分想定される再現期間とかそういったレベルがあると思うんですけども、そういうものを比較してみたとき、どういった自然現象が女川原子力発電所にとって一番可能性が高いのか、またどのくらいの再現期間の津波なり火山を想定されているのか。そしてそれに対して、もし第一線の防御が破られた場合の対応があつて、それでさらにリスクを下げるような工夫がなされていると思うのですけれども、そこら辺の全体像をご説明いただくと、多分県のほうとしても避難計画なり、いろいろな対応が進めやすいと思うのですけれども、個別にこれは地震、活断層はこうだ、津波はこうだというご説明をいただいても、その全体像として原子力発電所の全体としてのリスクはどういうところにあるのかというような全体像がちょっと見えてこないものですから、多分県のほうも、それから地元の自治体も、それから被害を受ける可能性のある漁業関係者等も、なかなかまとまった方向に議論を進めていくことができないのかなという感じがしていますけれども、その辺はどうなんでしょう

か。

○東北電力 自然現象に係るご質問ですけれども、これは出現頻度などを評価しているものではなく、例えば火山であれば女川原子力発電所から噴火が予想される火山の位置がどの位置にあるのか、仮に爆発等があった場合に、そこから火山岩が飛んでくる位置関係にあるのか、火山灰がどれほど降り積もるかといった評価をしております。それから、地震や津波についてはプレートでどういった破壊が起こった場合に、どの程度の地震が想定されるのか、また、近くに活断層が存在しますので、その活断層が動いた場合に発電所にどういった揺れが来るのかといった評価をしております。それに対して設備がどういった耐震条件なのか、また津波が来た場合にその敷地内に海水がかぶるようなことがあってはならないので、どういった対策を立てているのか。例えば防潮堤については、何メートルの津波に対して何メートルのものが準備されるのかと、そういったことでこの審査を受けるということになってございます。

日本国中の発電所を全て比較したわけではございませんが、例えば気候、竜巻等の条件ですと、西日本に比べて東日本の東北地域は非常に竜巻が起こりにくいといった条件なので、それを加えて竜巻による風速の考え方を条件に設定しまして、それに耐えられるかどうかという評価をしております。

○真野委員 例えば近々の災害として問題になったのは津波だと思うんですけれども、例えば津波に関していうと、どのくらいの規模の津波が起こるといふふうに想定して、そしてそれに対して防御施設がどういうふうになっていて、それを越えてやってきたものに対して、どの程度の被害を軽減するような対応になっているかというような、そこら辺の一連の防御体制が見えないものですから、多分その議論を深めていくといったことが難しくなってくるんじゃないかと思うんですけれどもね、私は。

○東北電力 津波につきましても、まだ審査過程にございまして、私どもの評価といったことであれば、例えば23.1メートルの津波という評価をございまして、それに対して29メートルの防潮堤で備えることとさせていただきます。これにつきましては、今後また評価し、この審査対応の中で議論を受けますので、この場でもまたご紹介させていただきますが、宮城県にて開催している安全性検討会という場もございまして、そちらでも丁寧にご説明していきたいと考えてございます。

○真野委員 了解しました。全体像がわかるように大枠を示していただいて、その中のことというふうなご説明をいただくと、我々としても理解がしやすくなります。

○東北電力 わかりました。まだ審査は続きますので、審査の終了が見えた段階で、わかりやす

い説明ができるよう工夫させていただきたいと考えます。

○議長 今、お話ありましたけれども、この新規制基準等についての確認と、また今回3・11で起きたダメージによる施設の検証というのは、別途学識経験者の方々による専門委員会を県で設けておまして、そちらで検討させていただいております。こちらの協議会は、あくまでも放射能あるいは温排水の、今冷温停止中であるにせよ燃料もまだあるという状況ですから、それが環境に与える影響があるのかないのかということをご議論いただく場がございますので、当会議はそちらのほうに軸足を置いた協議会でございますので、委員の皆様にはこの点ご理解いただきたいと思います。と思っております。

ほかに何かご質問等ございましたらお願いいたします。よろしいでしょうか。それでは、ちょうど時間にもなりましたので締めさせていただきます。

4. その他

○議長 事務局のほうから何か連絡事項等ございましたらお願いいたします。

○事務局 事務局でございます。次回の協議会の開催日を決めさせていただければと思います。

3カ月後の平成27年11月25日の水曜日、仙台市内での開催を提案させていただきます。

なお、開催日につきましては、時期が近くなりましたら改めて確認のご連絡をさせていただければと思います。以上です。

5. 閉会

○議長 以上をもちまして、今日の協議会を終了させていただきたいと思っております。

委員の皆様には大変ご協力、そして貴重なご意見ありがとうございました。

○司会 それでは、以上をもちまして、第134回女川原子力発電所環境保全監視協議会を終了とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。